

偉大な中退者・山室軍平
―「神の見えざる手」に導かれて―

講演	木原 活信【きはら・かつのぶ】
講師紹介	同志社大学社会学部教授

はじめに

2023年の同志社スピリット・ウィークにあたって、山室軍平を取り上げ、特にその同志社在学時代に焦点をあてていきたい。山室軍平は、石井十次、留岡幸助らと並んで日本の三大社会事業家の一人と評価され、またキリスト教界では日本を代表する伝道者（説教者）の一人とも称された人物である。

1. 山室軍平とは何者か？

まずは山室軍平について略歴を示しておきたい。1872年に岡山に生まれ、家庭に事情があつて養子に出されたが、家を出し、東京で貧しい活版工として働くことになった。そこで、1888年、当時16歳の山室は路傍伝道で語られる福音宣教を通してクリスチャンになった。その頃たまたま手にした『ジョージ・ミューラル氏小伝并演説 信仰の生涯 全』（明治22年）がターニングポイントになり、彼の記述によるとその冊子を「150回も暗記するほどに読み」、新島襄のもとで学びたいという強い思いにかられるようになった。

そして1889年に同志社に入学した。その後、1895年に救世軍に入隊し、日本人として初めての救世軍士官となる。救世軍は、ウィリアム・ブース（William Booth, 1829-1912）が創設したキリスト教社会事業団体であるが、今日では世界的にも最大規模の社会福祉団体の一つでもあり、教会としても世界的な広がりをもっている。

救世軍に入った山室は、社会問題の解決に奔走し、また伝道者として、知識層に留まっている「インテリのキリスト教」の在り方を批判し、誰にでもわかる宣教を目指し、特に労働者、生活困窮者に届く説教者として活躍した。1899年に『平民の福音』を刊行したが、これは大衆にわかる平易な言葉で福音を解説した古典として評価され、海外にも翻訳されるなど500刷を超えるベストセラーとなった。様々な社会問題の解決に奔走したが、特に娼妓廃業に尽力して、遊郭廃止を訴え、その利権に絡む間組織と対決した。また貧困者や失業者のために労働紹介所を設置した他、無料食事サービス（慈善鍋）も行った。また児童虐待防止法等の問題に着手するなどあらゆる社会悪と闘い続けた。

その特徴は、キリスト教の福音と社会問題解決を一体として捉える点である。信仰においては敬虔（けいけん）な福音主義の立場を貫徹したが、同時に社会の底辺で苦悩する人々の現実問題に実際に応えた。キリスト教が社会問題を忘れて教会内のみに留まる姿勢を批判したが、同時に教会が社会のなかに埋没し、世俗化の波に吞まれる姿勢をも批判した。貧しく小さき者の友として生き抜いた山室は1940年に永眠した。

2. 「同志社出身者中最大なる人物」の同志社中退の謎

さて、山室がなぜ同志社を中退したのか。これは理解に苦しむ話であるが、以下ではこの複雑な謎に敢えて立ち入っていききたい。ところで、同志社の中心人物であり、後に早稲田の教授となった安部磯雄（1865―1949）は、山室軍平を評して次のように述べた。

何といっても同志社の伝統的精神を以て、世に立ってゐるのは山室中将である。中将は本流を継いで来たが私共は支流である。中将は本家で、私共は分家である。本当の同志社ツ子といふのは、山室中将である（「ときのご叢」871号 1932年7月15日）。

このように安部は、山室軍平こそが新島襄の「同志社の本流」であり新島の継承者であると評価するのである。同志社大学のクラーク館2階には、山室を記念して「神ト人道ノ為ニ」と銘打ったタブレットが飾られている。このタブレットは、同志社創設者の一人宣教師デーヴィス（Jerome Dean Davis, 1838-1910）の息子ジェローム（Jerome Davis）の寄付記念に際して設置されたもののだが、その設置の趣旨が当時の「同志社出身者中最大なる人物」を記念するというものであった。つまり、当時において山室こそが「同志社出身者中最大なる人物」と評価された人物であることを客観的に示すものである。そう考えると、山室が「同志社の本流、同志社の良心」「同志社出身者中最大なる人物」であることになるが、彼と同志社との関わりには実に複雑な謎がある。後述するが新島襄の人格と信仰に憧れ、同志社に入学したのは1889年9月のことである。そして5年間この同志社で学園生活を送る。

「同志社時代の山室軍平」として一般的によく知られているのは吉田清太郎（1863―1950）との友情物語である。後に牧師になるこの吉田が自ら京都御苑の池の「猫の死体」を食べて飢えを凌ぎつつ、山室の学費を肩代わりするという「自己犠牲」による献身的な友情により、同志社で学ぶことが許されたというエピソードである。この記述は、これまでの山室の多くの伝記の中心的位置を占め、「同志社時代の山室」を躍動的に描くのを手助けしている。事実、2016年に上映された映画『地の塩 山室軍平』（東條政利監督、現代ぶろくしょん）においても、このエピソードはハイライトの一つであった。しかしこのエピソードがあまりに美しく、そしてそこに山室の同志社時代が焦点づけられ過ぎる傾向があるため、その影で一つの重要な点を見落しがちである。それは、山室が同志社を中途退学しているという点である。同志社社史資料編集所編『同志社九十年小史』（1965）の記述によると、山室軍平は「苦難を乗り越えて卒業した」（558頁）となっているがこれは事実ではない。学費の手助けをしてくれた吉田清太郎のような友に巡り合い、その支援を受け、また同志社時代の成績も良好であったにもかかわらず、最終的には退学しているという意外な真相である。正確にいうなら、山室軍平は、同志社の卒業生ではなく、皮肉交じりにいうならば「偉大な中退者」に過ぎないのである。

それでは、何故に憧れた同志社を半ばで退学せねばならなかったのか。これまでの多くの先行研究ではこのことは等閑視するか、その退学理由を山室軍平自身の心がわりの激しい性格、あるいは怠惰心や経済的貧困による学業放棄に求めてきた。確かにそれも一つの要因であったことに違いないが、それだけで退学したとは考えにくい。以下では更にその経緯を考えてみたい。

3. 同志社入学の経緯

まずは山室の同志社への入学の経緯を改めて整理しておきたい。「ただ今京都に新島襄という先生がおられ、わたくしどもがそのそばに行って、何でもよいから三十分ほどもお話して帰ると、あと一週間くらい、何となく気がすがすがしいように感じる」（山室1929：40）と、新島の弟子であり、新進気鋭の評論家徳富蘇峰（1863―1957）が東京の福音教会の青年会で演説した。その話を直に聞いていたのが、キリスト教に入信し「神と平民に仕えん」と燃えていた16歳の「家出少年」山室であった。彼はこの時の事をこう記している。

わたくしは、それを聞いて非常に感動したのである。格別に現在の日本に、新島襄氏のような生きた人格者がおられることを知って、もはや矢もたてもたまらなくなり、どんなにしてもその人のもとに行き、その高貴な品行の感化を受けずにはいられないと、熱切に希望するに至ったのである。（山室1929：40―41）

しかし、山室にとって、経済的余裕は全くなかった。この時折しも、英国のプリストルの孤児院創設者であり、独立伝道者であったジョージ・ミューラー（George Müller, 1805-1898）が同志社で講演を行ったときに新島襄らにより刊行された一冊の「小冊子」と出会うことになった。このミューラーの言う「人が神に願うことは、御心ならばかならず答えられん」という「単純な信仰」に山室は自ら覚醒させられたと述懐する。（この詳細は、木原（2023）の研究を参照されたい。）

わたしはそれを一読して感激に耐えず、ぜひ一冊手に入れたいと思ったが、それを買う金を持たないので、小冊子を借りて帰って手書きし、それ以来毎回数回それを読んで神に祈り、また読んでは神に祈り、少なくとも百回か百五十回くらいは熟読して神に祈っている間に、わたくしの胸のうちにはいつしか、「ミューラーを助ける神は、またわたくしを助ける神だ。わたくしはこのミューラーの神に頼って大胆に京都にいこう」との相当に強い信仰がわいて来るようになったのである。（山室1929：42）

彼は晩年にこのミューラーの小冊子を自ら複製、編纂（へんさん）している。このことから山室が生涯にわたっていかにミューラーの思想に入れ込んでいたのかがわかる。そして、小冊子のなかでのミューラーの「進言」により、将来の学費と生活費の見込みがなにもないにもかかわらず、同志社の夏期学校に行くことになった。ここで、憧れた新島襄と初めて出会う。しかし残念ながら当時新島は、体調を崩し、この夏期学校にも「しばしば集会には顔を出されたが、口を開いて物を言われたのは、ただ一回だけで、それさえほんの十分か、十五分間、感想を述べられたに過ぎなかった。」（山室1929：44）と言う通り、直接の弟子になるとは言い難い関係であった。それでも新島から授かったメッセージは次のようなものであったと述懐する。

明治維新の改革は、青年の手によって成された。そのように神の国を建設する大業も、また青年の力に待つところが最も多い。一本のたきぎは盛んに燃える力がない。けれども、多数のたきぎが集まれば勢い盛んに炎上する。そのとおり諸君もまた、協心協力して同胞の救いのために戦わねばならない。（山室1929：44）

山室は、「その言われたことはきわめて単純であったが、それが神を愛し国を思う赤心からほとばしり出たのであるから、聞く者に最も深い感化を及ぼしたことは、さらに不思議もなかったのである」（山室1929：44―45）と述懐している。この夏期学校終了後に、正規に同志社予備学校を受験して合格し、同志社の学生となった。ミューラーの「単純な信仰」のすすめによ

り、神の御心を願えば神が備えてくださる、と単純に信じきったということである。常識的に考えれば無謀としかいいようがなかったのであるが、それが実際に可能となったのは、先述した吉田清太郎の支援があったからであった。吉田という学友の自己犠牲的な友情の支援で、学費を工面してもらったおかげで、学業生活を続けられたのである。山室は吉田の支援を当時知らされていなかったようであるが、ミューラーが言う通り、すべてのものは「神が備えられた」と単純に信じていたようである。

4. 新島襄の死と山室の失望

山室は同志社人としての第一歩を踏みだすのであるが、実はその翌年、1890年1月23日に新島襄が死去する。新島と半年しか過ごすことはなく、しかもこの半年も新島が多忙と体調を崩していたゆえに、結局、新島とまともに対話すらできなかった。しかし山室は、一つの励ましの言葉を新島から直接ではなかったが受けたと次のように述懐している。

新島先生が相州大磯で四十八歳（原文ママ）の荘齡をもって世を去られたのは、明治二十三年一月二十三日のことであった。わたくしはその一年ほど前に、徳富氏から先生の高徳のことをうけたまわり、その高風に接したいばかりに同志社に入学したのである。ところが先生はそこ、はや非常に健康を書しておられたのと、また一つには同志社大学設立の運動が多忙であったのと、二つの理由によって、少しも学校には出られなかった。ただ一度吉田君（筆者補注：吉田清太郎のこと）が先生を訪問し、わたくしのことについて話してくれた時、先生は君にむかい、「どうかその青年に、まだ若いから、しっかりやれと伝言してください」と、言われたそうである。これは先生が特にわたくしのために語られた唯一の金言として、わたくしはありがたくそれを拝承し、現にそれから四十年を経た今日でもなお、それを「まだ未熟だから、しっかりやれ」という意味に解して、先生の忠告を重んじたいと、心がけている次第である。

わたくしは新島先生の死去に接して、一時非常に力を落とした。けれどもまた考えてみれば、先生を起したもうた神は、生きていますのである。わたくしどもはその神によって自分を励まし、及ばずながらまたおのおの先生の精神と人格とにあやかることがなくてはならない。（山室1929：55—56）

折しも日本のキリスト教神学界にも自由主義神学が入ってきていた。その影響を早く受けたのは同志社であった。新島の死後の翌年、すなわち1891年に同志社の後継者と目された金森通倫は「日本現今の基督教並に将来の基督教」の論文を著（あらわ）し、自由主義神学転向の宣言をした。横井時雄（1857—1927）らも自由主義神学を主導してそれに続いた。またアメリカン・ボードを激震させた小崎弘道の宣教師批判の発言も1893年のことであった。つまり、新島亡き後の同志社で、多くの学生とともに山室はこのような雰囲気の中で学んでいたのである。山室はこの当時の事を赤裸々にこう証言している。

明治二十三、四年ころから、日本にユニテリアンだの、宇宙神教（ユニバーサリズム）だの、またはドイツ神学だのというものが、ほとんど一時に流入し、それまできわめて単純に、いわゆる正統派の信仰を守って安心していた日本のクリスチャンを驚かした。そのうち金森通倫、横井時雄などの諸先輩が、古い信仰を捨てて新神学に走り、はては伝道界を去られるような事件も起きて、日本のキリスト教会は一時大きな危機に襲われたのである。

その当時のわたくしなどはもとより、込み入った神学説を理解する力も持たなかったが、それにしても、どうせ一生、宗教に身を献げようと思心する者であるから、わかつて、わからないでも、そうした方面の書籍や雑誌など、手当たり次第に乱読し、またしきりにそれらの題目に関する演説、説教等を聞く間に、最初の単純な植えつけられたままの信仰は、きれいに破壊されてしまった。もはやキリストの神性も、その奇跡も、十字架も、復活もわからなくなって、神は以前のようにつかしい愛の父上ではなく、かえって正義の審判者が何かのように感じられ、キリストの仲保者としてのみわざは見失って、今はただ堅苦しい教師か、または人格の模範とだけ見えるようになり、前には響きが声に応じるように聞かれた祈りも、今は空に向かって物を言うように思われだした。こうしてわたくしの心の平和は消え失せ、霊の生命は全くかわききったのである。（山室1929：101—102、傍線筆者）

「明治二十三、四年」（1890～1891）というのは新島の死とその直後の年とも重なり、この山室の発言は当時の同志社の雰囲気を知る上において貴重な証言である。山室の発言によると、その時に同志社内部において神学上の転換があったと指摘している。むしろ、これらの兆候は、それ以前からも燦（くすぶ）っていたが新島や宣教師の指導のもとにコントロールされていたようであるが、その死後、山室の記述からすると、「同志社全体」を覆（おお）ったというのである。当時の同志社は、現在とは違い、宗教（信仰）が大きな位置を占めていた時代であったので、神学上の変遷はストレートにそのまま学風にも影響を及ぼしたということは容易に想像できる。

山室自身は、新島亡き後に同志社内にもミューラー主義や伝統的神学への反動を感じ、新神学が基軸になったと否定的に捉えていた。このように、急速に変化するようにみえた当時の同志社に山室は失望していく。彼が同志社に期待していたジョージ・ミューラーの信仰は崩れ去り、迷いの学生生活に苦悶した。同時に彼につきまといっていた慢性の「貧困病」も、実際深刻になってきたようで苦学は深刻になり、彼は食べるにも困っていたようである。以下に述べる通りである。

こうしてわたくしは思想上、信仰上、容易でないうず巻きの中に巻きこまれると同時に、物質上にはまた、学資の不足から来る困難のためにいろいろ苦心していたのである。ある年などは、毎月金二円で食事も、書籍も、日用品も、一切を支弁せねばならないことが半年も続いたので、その年の正月から六月まで、飯は食ったけれども、一切副食物を食べず、ただ塩だけなめていたのである。（山室1929：104）

しかし山室の性分からすると、仮にパンに飢えても勉強が続けられないことはなかったであろうが、「神の口からでる言葉」に飢えたと感じた彼は失意のどん底にあったようである。そしてついに一切が空虚と化し、「靈魂が衰え、肉体が弱り、勉強にもあまり身が入らなくなって」しまったようである。

5. 同志社中退の経緯

かくして山室軍平は1894年6月に、同志社を中退した。

わたくしは明治二十七年六月に、同志社を飛び出した。卒業したのではない、いいくらいで飛び出したのである。その当時のわたくしは靈魂が衰え、肉体が弱り、勉強にもあまり身が入らなくなって、それでも「神と平民とのため」との初一念だけは、おぼつかないながらも残っていたから、いっそ今のうちに学校をやめて、直接伝道にでも従事したら、その方がもっと明るく、もっと希望のある道に出られるかもしれないと、適当なところで学校生活に見切りをつけ、備中高梁に帰り、ほとんど強制的にそこの教会の伝道師として雇ってもらったのである。（山室1929：105）

更に、彼が在学時に記した重要な論文である「完伝道者」で、日本のキリスト教界は腐敗しきっており、殊にその指導者を、以下のように激しく批判する。

優柔不斷日々ニ空漠ナル儀文ニ拘泥シ、迷妄ナル卑見ヲ伝説シ、徳ナク量ナク叻ニ奇怪ノ語ヲ弄シ、識ナク信ナク徒ラニ習ヲ儘ヲ受買シ、外人ヲ動カスノ能力ナク、内神ニ迫ルノ至誠ナシ、然カモ且ツ人ヲ罵リテ八罪人ト呼ビ自ラ許シテ神ノ子トナシ　・・・中略・・・　時アリテ塩其味ヲ失ヘルモノ、如ク・・・（山室　1892：16—17）（旧字体は、新字体に改め、適宜、句読点を打った）

新島襄の死後2年後の1892年に学内で発表されたこの論文は、当時の新島亡き後の同志社への警告とも判断される。彼はこの論文「完伝道者」のなかでこう結論づける。「基督教会ハ今ヤ天地ノ粹ヲ集メ宇宙ノ美ヲ吸ヒ千古ノ俊二学ビ当世ノ急務ニ応スル基督的真箇偉大ノ完伝道者ヲ待ツヤ極テ切ナリ」。この偉大な「完伝道者」というイメージこそ、実は同志社を中退して、救世軍において福音宣教をすることになる後の伝道者である山室自身のイメージと重なる。この「完伝道者」執筆後、1894年に青年山室は同志社を卒業することなく、「いいくらいで、飛び出した」。その意味で、この「完伝道者」は、山室にとって事実上の「卒業論文」になったともいえる。

まとめ

1894年に山室はあれほど憧れた同志社を「いいくらいで、飛び出した」のであるが、新島の霊前に誓った通り、熱烈な信仰を抱いて、社会の最底辺の人々の魂を救う伝道者となり、また彼らの困窮を助ける社会事業家として献身した。

同志社時代の山室は、当時の学生たちの中では個性的で、奇異にすら見えたほどユニークな学生であったようである。しばしば祈りの際に感極まって涙を流すことがあったのでニックネームは「泣き虫」であった。しかし、新島が同志社に期待していたような人物とは、同志社が輩出した他の多くの秀才や著名人よりは、むしろこの「泣き虫」の一貧乏学生であり、まさに「傀儡不羈（てきとうふき）」な学生であり、「良心の全身に充滿した」山室のような人物ではなかったろうか。先に提示した安部磯雄の「山室軍平こそ、同志社の本流・本家」が客観的な正しい評価であるとするなら、その「本家」の山室がこのキャンパスを飛び出したということでは、文字通り皮肉な結果になってしまった。

同志社のスピリットを考えるにあたって、「同志社出身者中最大なる人物」「偉大な中退者」である山室軍平の同志社時代に焦点をあててみたが、キーワードを挙げれば、家出、キリスト教入信、ミューラーの「小冊子」との出会い、同志社入学、友（吉田清太郎）の支援、新島の死、そして同志社退学ということになるが、これら一つ一つのキーワードをとってもそれは濃密な5年間であり、まさに波乱万丈の同志社時代であった。しかし、後に日本を代表する伝道者、社会事業としての偉大な働きをみると、この山室の同志社の青春時代での出会いと別れ、苦悩と葛藤も不思議な神の導きの一つであったと言うことはできないだろうか。いずれにせよ、山室の生涯には常に「神の見えざる手」としかいいようがない「神の導き」があり、「ヤーウェ（アドナイ）・イルエ」יהוה יהוה、すなわち「主の山に、備えあり」（創世記22章14節）という天来の導きに応じた生涯そのものであったと言わざるを得ない。その山室の一つ一つの息吹と足跡こそが同志社スピリットそのものであり、そしてそれが今も広大になったキャンパスに息づいていると言える。

〔参考文献〕

秋元巳太郎『山室軍平の生涯』（改訂版）救世軍出版供給部 1983年

安部磯雄、鎌田研一『伝記小説賀川豊彦』 不二屋書房 1934年

同志社社史史料編集所編『同志社九十年小史』 1965年

同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同朋社 1991年

石塚正治編『新島先生言行録』大阪福音社 1891年

木原活信「同志社のアイロニー―山室軍平の中途退学―」（同志社新島研究会『新島研究』82号139―162） 1993年

木原活信『ジョージ・ミューラーとキリスト教社会福祉の源泉―「天助」の思想と日本への影響―』教文館 2023年

救世軍「とこのころ」871号 1932年7月15日

新島全集編集委員会編『新島襄全集』4 同朋舎出版 1989年

三吉明「山室軍平」吉川弘文館 1971年

本井康博「山室軍平の教会活動―救世軍への助走―」同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同朋舎 1991年

高道基『山室軍平』日本基督教団出版局 1973年

杉井六郎「同志社時代の山室軍平」同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同朋舎 1991年

山室武甫『平民の使徒山室軍平』福音宣教会 1980年

山室軍兵＊「新島先生ヲ吊フノ文」『同志社文学会雑誌』第31号 1890年

山室軍兵＊「福西しげ子、横屋幸完、横屋姉への手紙」（1895年7月28日付）（山室軍平選集刊行会編『山室軍平選集第十巻書簡集』9―16頁 1955年3月

山室軍兵＊「完伝道者」『同志社文学会雑誌』第51号 1892年

山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部 1929年 本稿は1984年版から引用

山室軍平編「信仰の生涯 ジョージ・ミューラー氏小傳并演説」 不二屋書房 1935年

＊本報告は、木原活信「同志社のアイロニー―山室軍平の中途退学―」（同志社新島研究会 『新島研究』82号1993）および木原活信『ジョージ・ミューラーとキリスト教社会福祉の源泉―「天助」の思想と日本への影響―』（教文館2023）をもとに加筆修正した内容を報告をしたものである。

2023年5月16日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺校地 「講演」記録